

「星の語り部」の活動

～見えない・聴こえない人たちとのプラネタリウム～

高橋真理子(山梨県立科学館)、星の語り部

「星の語り部」は、山梨県立科学館のプラネタリウムに集って、老若男女がさまざまな表現活動を行っている市民グループで、2004 年から活動が続いています。2010 年のユニバーサルデザイン天文教育研究会において、星の語り部の活動について発表[1]した以降の活動、特に、語り部が制作するプラネタリウム番組について紹介します。

1. 「星の語り部」とは

「星の語り部」は、山梨県立科学館のプラネタリウムで活動するボランティアグループです。小学生から 60 代ぐらいまでの人が、全世代にわたって参加しています。また、視覚障害者、自閉症者も参加しています。2004 年に、当方が企画した「プラネタリウム・ワークショップ」は、「見るだけではなくもったいない。もっとプラネタリウムを使おう」というキャッチコピーのもと、市民参加型のプラネタリウムのあり方を模索するものでした。そのワークショップで、いわゆる「しろとさん」の表現がとても素晴らしく、表現の場としてのプラネタリウムというものの価値を教えてもらいました。そのメンバーが継続して活動をはじめようになって「星の語り部」ははじまりました。それからおよそ 10 年たち、これまでにこのグループに関わってきた人々は延べ 150 人ほど、来る人、去る人、ゆるやかなネットワークで、毎年活動が続いています。これまでさまざまな活動をしてきましたが、やはりメインの活動になっているのは、夏の「夕涼み投影」の制作です。

2. 夕涼み投影の制作

2004 年夏に、一般市民が制作したものを来館者に観覧無料で見せるということを行って以来、毎年継続して制作が行われています。その作品数は、2013 年夏時点で、16 作品となりました。04 年当初は、画像と音楽のみのいわゆるスライドショーでしたが、視覚障害者のメンバーが仲間に入った時点で、作品の方向はだいぶ変わり、言葉を中心としたものとなり、また、年毎に、多才なメンバーが集まってくることで、企画・脚本・ナレーション・音楽・録音・合唱・絵などを、すべてメンバー自身の手によって制作するようになりました。みえないメンバーがいるおかげで、「見えない宇宙を共有する」というのが暗黙のテーマになっているようにも思います。また毎年行う「プラネタリウム・ワークショップ」は、一般の人向けにやっているものですが、星の語り部も参加することで、次なる夕涼み投影の企画のヒントを得る場にもなっています。

2.1. 「ねえ おそらのあれなあに」

2010 年11月にNPO法人ユニバーサルデザイン絵本センター[2]が毎年出版している絵本の一つとして、星の語り部が企画・執筆した絵本「ねえおそらのあれなあに」が出版されました。盲学校の生徒さんたちにもとても喜んでもらい、制作者一度感激をしたという経験もあり

ます。このたびのUD研究会においても、見えない方が「これは素晴らしい！」と大変ありがたいコメントをいただきました。



写真1 ユニバーサルデザイン絵本「ねえおそらのあれなあに」の表紙

「指でたどる夏の星座」「みんなで天文手話を考えよう」「夏の大きな三角がみつけれられるかなあ?!」等の文字が見える。

2011年夏の「夕涼み投影」は、この絵本を原作としてつくりました。番組中には星の点図を配り、街の星、里の星、山の星で、見える星の数がだいぶかわるのを「感じて」もらうようにしました。この絵本と番組を体験して下さった盲学校の生徒さんなどが取材されたテレビ番組の一部を you tube で見ることができますので、ぜひ一度ご覧ください。[3]

また、星の語り部の制作する「夕涼み投影」は、すべて手作りで行なっているもので、使っている館の予算はゼロです。(もちろん設備は使っていますし、館職員もサポートしていますが。)夏の間の投影期間中に数千人の人たちにご覧いただくのですが、もっと多く人たちに伝えたい、という思いで、現在、館のキッズ番組の一つとして、(館の予算を使って)作り直しをしている最中です。これについては、尾関さやかの集録をご覧ください。

2.2. 指でたどる夏の星空

2011年1月におこなったプラネタリウム・ワークショップには、2010年のUD研究会でお会いした、「竜のおとし子星の会」の飯塚高輝さんに来ていただき、「天文手話をつくる」ワークショップを行いました。そのワークショップをきっかけに、これまで見えない人たちと楽しむことを

テーマにしてきたところを、聴こえない人たちともぜひ、ということになり、2012年の夕涼み投影は、手話を取り入れたものとなりました。

この番組の特徴は

- ・ 全編手話つき
- ・ 一緒にきた人と相談する時間がある“おしゃべりプラネタリウム”
- ・ 手をつかって星をはかったり、手話を一緒にやったり、一緒に考えたりする時間がある
- ・ 点図をつかう場面もある
- ・ 俳句や短歌も盛り込まれている

というものです。内容としては、これまでの夕涼み投影の特徴の一つであった「物語形式」を変えて、いわゆる星座の解説がメインなのですが、上記のような特徴だけでも、星の語り部らしさがでていて、ちょっと他では体験できないものになっていると感じます。ドーム内で親子で会話したり、一緒に手話を考えたりすることがとても和やかな空気をつくり出していました。また、ろう学校に通い生徒さんからは、「いつもシアターは好きでよくきていたけれど、やっぱりよくわからないことが多いので、こういうことをやってもらえるとすごく嬉しい」という感想をいただきました。他、「手話のことをもっと知りたい」「今日実際の空で探してみます」「つくり手のみなさんの暖かさを感じました」などという感想が多く集まりました。

指でたどる
夏の星空

スペースシアター
夕涼み投影プログラム
全編手話つき

夏の大三角
見つけられる
かなあ?!

みんなで
天文手話を
考えよう!!

天の川を
表現した
「触る」星の
点図も!

星にちなんだ
短歌や俳句も
お楽しみに

2012 山梨県立科学館スペースシアター
夕涼み投影プログラム by 星の語り部

投影期間 7/21(土) ~ 8/26(日)

夏休みの土日祝 17:10~17:40

観覧無料

星と星をむすんでつくられた星座は、実にさまざまな形を表しています。そんな星座を、指や手を使って表現したら、どんなものができるでしょうか? 科学館ボランティアのサイエンスシックルー「星の語り部」が、手作りで制作する作品です。お気軽にお楽しみ下さい。

図1 2012年夕涼み投影のちらし

また、この投影の経験を生かし、科学館が行っている団体投影の中で、ろう学校の団体がきた際に、リアルタイムで解説に手話をつけることができるようになりました。2013年6月に、東京のろう学校が団体利用された際、ドームに手話をする先生を映し出し、なるべく解説をする星座の近くに先生の姿がおけるように順次映像の場所を動かすようにしました。子ども達には、最初に「指でたどる夏の星空」をみてもらい、そのあとに、その日の夜の星空を体験してもらいました。いつも見慣れている先生の手話は、やはり子どもたちにとってわかりやすく、「すごくいろんなことがわかって、とっても楽しかった！」と言ってくれた生徒さんたちの表情が実に印象的でした。



写真2 「指でたどる夏の星空」の番組の様子。地球がうつり、そこに短歌が書かれ、手話通訳者がドームにうつっている。



図2 ろう学校の団体投影について伝える毎日新聞(全国版)の記事

新聞記事(前ページ)の写し:

◇聴覚障害のある子どものため、スクリーンに手話を映し出したプラネタリウムの上映会が4日、甲府市の山梨県立科学館であった。東京都立立川ろう学校(立川市)の生徒ら約40人が楽しんだ。

◇天文アドバイザーの高橋真理子さん(43)＝甲府市＝らが企画。満天の星を映した天井に、手話で同時通訳する高校の男性教諭の姿を併せて投影した＝写真。

◇手話は字幕と違ってアドリブも可。解説の高橋さんが「夏の大三角形はどれ?」と問い、生徒が一斉に指さす光景も。生徒の多くはプラネタリウム初体験で、最後は「楽しかった。ありがとうございます」と手話で感謝を伝えていた。

3. 被災地への出張プラネタリウム

本題とは別のことなのですが、2012年に被災地をいくつかまわって出張プラネタリウムや工作イベントをやってきたことがあります。そのことを少し報告します。館のボランティア研修の一環として、語り部メンバー10名が、移動プラネタリウム、スペースシミュレーター体験、星座カードや地球ごまづくりなどを行うイベントを開催しました。尋ねた場所は、気仙沼市立条南中学校仮設住宅、気仙沼市民会館、石巻相川運動公園仮設住宅、陸前高田滝の里仮設住宅、南三陸平成の森アリーナです。

気仙沼でプラネタリウムをやったとき、こんな会話が 있었습니다。自治会の会長さん「天国っていうのはどこにあるのかね」「あーやっぱり星の世界にあるんじゃないでしょうか」「誰も帰ってこねえから、きっとすごくいい場所なんだべな」「そうですね。きっとほんとに美しい場所なんだと思います」

同じ仮設ですぐ近くに住んでいても、震災前より互いの会話がなくなったという話もお聞きます。外部の人間がくることで、しかも、星空を見上げるという視点が与えられることで、いつもと違うコミュニケーションができたことを喜んでくださる方々もいました。当事者でない人たちがちょっとだけ行ってなんだ、という心苦しさはあれど、やはり、経験者じゃない人たちが、今の彼らのことを「忘れないこと」、そして、直接的な交流を行うこと、それはすごく大切なことのように感じています。

語り部メンバーも今回の遠征ではじめて被災地を見た人たちもいました。語り部メンバーにとってこそ、学びの旅だったと思います。遠征のための費用の問題はつきものですが、今後も語り部活動の一つとして、続けていきたいと思っています。



写真3 気仙沼でのプラネタリウム実施の様子

4. まとめにかえて

星の語り部の活動は、星や宇宙を中心にすえながら「表現」「受容」「感動」「共有」というキーワードが連鎖しているところが特徴です。人は自己表現し、それを他者と共有することなしに生きていくことはできません。星や宇宙のユニバーサル性ゆえに、このような語り部の活動が成り立っているのだとも感じます。宇宙というユニバーサルな対象を、さらに多くの人たちと共有することで、みんなのよりよく生きたいという願いを少しでも実現できれば、と願いながら、語り部活動を続けていきたいと思っています。

参考文献・URL

- [1] 高橋真理子・星の語り部 「見えない宇宙を共有する～星の語り部の活動～」, 2010年UD天文教育研究会集録 <http://tenkyo.net/wg/ud2010/index.html>
- [2] NPO法人ユニバーサルデザイン絵本センター
点字と触図のついた絵本を発行しているNPO法人。 <http://www.ud-ehon.net/>
- [3] 星の語り部ウェブサイト
<http://hoshinokataribe.main.jp/>のトップページから、取材されたテレビ番組の一部がリンクされています。